

1) はじめに

- ・精神医学と犯罪学は個々の戦争犯罪人だけでなく戦争と戦争犯罪をも研究の対象にするべきである — エランベルジェ
- ・国民学校六年生で太平洋戦争の敗戦を迎えた私には、戦争の切れ端を知る者として未熟な考えを「観察」と題して提出せずにはおれない気持ちがある
- ・戦争を知る者が引退するか世を去った時に次の戦争が始まる例が少なくない
- ・今、戦争をわずかでも知る世代は死滅するか現役から引退しつつある

2) 戦争と平和とは非対称的である — まず戦争についての観察

- ・戦争は進行してゆく「過程」であり、平和はゆらぎをもつが「状態」である
- ・「過程」は理解しやすく、ヴィヴィッドな、あるいは論理的な語りになる
- ・「状態」は多面的で、名づけがたく、語りにくく、つかみどころがない
- ・戦争を繰り返すうちに、人類は戦闘者の服装、挙動、行為などの美学を洗練させてきた
- ・中国との戦争が近づくと幼少年向きの雑誌、マンガ、物語がまっさきに軍国化した
- ・指導層の責任は単純化される
- ・指導層が要求する苦痛、欠乏、不平等は民衆が受容し忍耐するべきと倫理性を帯びる
- ・「生存者罪悪感」
- ・兵士という膨大な雇用が生まれて失業問題が解消し、兵器という高価な大量消費物質のために無際限の需要が生まれて経済界が活性化する
- ・太平洋戦争は、国民の貯蓄を悪性インフレによってチャラにすることで帳尻を合わせた
- ・戦争中の社会は、軍官民を問わず、ずいぶん差異が大きい社会であった
- ・裏面では、徴兵回避の術策がうごめき、暴力が公認され、暴利が横行し、放埒な不道徳が黙認され、黒社会も公的な任務を帯び、大小の被害は黙殺される
- ・戦争とはエントロピーの大きい（無秩序性の高い）状態であって、これがもっとも一般的な戦争と平和の非対称性なのであろう

3) 「状態」としての平和

- ・戦争が「過程」であるのに対して平和は無際限に続く有為転変の「状態」である。だから、非常にわかりにくく、目に見えにくく、心に訴える力が弱い
- ・平和は絶えずエネルギーを費やして負のエントロピー（ネグエントロピー）を注入して秩序を立て直しつづけなければならない
- ・全体主義的な秩序は、硬直的であって、自己維持性が弱く、しばしばそれ自体が戦争準備状態である。さもなくば、裏にほしいままの腐敗が生まれている
- ・負のエントロピーを生み出すためには高いエントロピー（無秩序）をどこかに排出しな

ければならない

- ・ 現在の問題でいえば整然とした都市とその大量の廃棄物との関係である
- ・ しばしば国家は内部の葛藤や矛盾や対立の排泄のために戦争を行ってきた
- ・ 平和維持の努力は何よりもまずしなやかでゆらぎのある秩序を維持し続ける努力である
- ・ 平和が珠玉のごとく見えるのは戦争中および終戦後しばらくであり、平和が続くにつれて当然視され「平和ボケ」と蔑視される
- ・ 平和は、人に社会に埋没した平凡な一生を送らせる。人を引きつけるナラティブ（物語）にならない。「戦記」は多いが「平和物語」はない
- ・ 戦争体験は繰り返し語られるうちに陳腐化を避けようとして一方では「忠臣蔵」の美学に近づき、一方ではダンテの『神曲・地獄編』の酸臭に近づく
- ・ 実情に反して、社会の墮落は戦争ではなく平和時のほうが意識される。社会の要求水準が高くなる。そこに人性としての疑いとやっかみが交じる
- ・ 長期的には指導層の戦争への心理的抵抗が低下する
- ・ 戦争に対する民衆の心理的バリエーションもまた低下する。
- ・ 国家社会の永続と安全と関係しない抹消的な摩擦に際しても容易に扇動される

4) 戦争準備と平和の準備

- ・ 平和は積極的に構築するものである
- ・ 戦争が始まりそうになってからの反対で奏効した例はあっても少ない
- ・ 「認知的不協和 cognitive dissonance」

両立しがたい二つの認知の片一方を切り捨てる心理過程

- ・ 正しく認知した者でも孤独の中で死を覚悟した発言を行って後世の評価を待つものは極めて少なく、それに耳を傾ける者の存在はほとんど期待できない
- ・ 平和運動の中には近親憎悪的な内部対立が起きる傾向がある。平和を唱える者は同調者しか共鳴しないことばを語って足れりとするようになる
- ・ 戦争の準備に導く言論は単純明快であり、簡単な論理構築で済む
- ・ 「平和」さえ戦争準備に導く言論に取り込まれる。日中戦争のスローガンは「東洋永遠の平和」であった。戦争の否定面は「選択的非注意の」の対象となる
- ・ 人間が端的に求めるものは「平和」よりも「安全保障感 security feeling」である。まさに「安全の脅威」こそ戦争準備を強力に訴えるスローガンである
- ・ 人間は老病死を恐れ、孤独を恐れ、治安を求め、社会保障を求め、社会の内外よりの干渉と攻撃とを恐れる
- ・ 戦争への心理的準備は、国家が個人の死を超えた存在であるという言説がどこからとなく生まれるあたりから始まる
- ・ 指導層内部でも不可避論が主流を占めるようになる。一種の自家中毒、自己催眠である
- ・ 進むより引く方が百倍も難しいという単純きわまることで開戦が決まるのかもしれない

5) 戦争開始と戦争の現実

- ・戦争の前には独特の重苦しい雰囲気がある。いっそ始まってほしいというほどの、目に見えないが今にもはちきれそうな緊張感がある
- ・戦争開始直後には反動的に躁的祝祭的雰囲気がわきあがる。祝祭の持続期間は一か月、せいぜい三か月である。それが過ぎると戦争ははじめてその恐ろしい顔を現してくる
- ・戦争は無際限に人命と労力と物資と財産を吸い込むブラックホールとなる
- ・開戦とともに戦争はすべての人の地平線を覆う。地平線の内側では安全の保障は原理的に撤去されている。あるものは「執行猶予」だけである
- ・米国の兩次大戦激戦地における戦争神経症発症状態は克明に記述されている。同程度の激戦を経験して戦争神経症になった日本兵はほとんど帰還していない。米軍のように孤立した兵士を救出する努力をしない。第一次大戦初期の英軍も、太平洋戦争後半の日本軍も、その真の戦争体験は永久に不明である。人類の共通体験に織り込まれない
- ・爆撃が重なるとともに次第に想像力が委縮し、麻痺し、爆撃によって炎上する都市を目撃してもそこに何が起きているかを想像しなくなる（解離状態）

6) 戦争指導者の願望思考

- ・戦争中の指導層に愕然とするほど願望思考が行き渡っているのを実に多く発見する。しかも、彼らは願望思考に固執する。これは一般原則といってよい
- ・第一次大戦において、すべての列強の指導層が積極的には戦争を望まないまま「ヨーロッパの自殺」といわれる大焚火の中に自国を投入していった
- ・太平洋戦争ですら、心理的窮地に立っての開戦決定にもかかわらず、シンガポール陥落で有利な講和を結ぶ状況が生まれるはずだと信じていた
- ・そうならなかった後は打つ手がなくなった
- ・太平洋戦争は、連合国の植民地軍に勝利し、本国軍に敗れたということである
- ・最高の願望思考は本土決戦である。もし実現すれば、講和条約が有利になるどころか、一九四五年春のルソン島戦の再現となり、兵と民衆が山野を彷徨って遂に人肉食の極限に至っていたであろう

7) 日露戦争がなかったなら

- ・東北アジアを生命線とする発想は、実に島津斉彬、吉田松陰らにまで遡る。彼らは、当時の日本が存亡の危機にあると考え、それを脱するにはどうすればよいかを考えた
- ・当時、世界の国家は数種類しかなかった。①、植民地を拡大しつつある帝国主義国家
②、独立を失い帝国主義国家に併合されつつある中東、アジア、アフリカ、大洋州などの小国家、部族国家、エスニック地域など
③、統一を目指す小国家群地域（ドイツ、イタリア）

- ④、清、トルコ、オーストリア - ハンガリー複式帝国などの近代以前に成立した多民族国家で、境界部を蚕食されつつあり分裂される危機があるもの
- ⑤、合衆国の傘下に入りつつある旧スペイン帝国領ラテンアメリカ国家
- ⑥、西欧に倣い近代国家を整備しつつある境界国家
 - ・世界の土地にはすべて国旗が立ちつつあった。日本は態度決定を迫られていた
 - ・エジプトについて、日本、エチオピア、タイが近代化に進む。アジア・アフリカで曲がりなりに独立を全うしえたのは、中国を別にすればこの三カ国だけである
 - ・幕末の英米が南北戦争、クリミア戦争、インド兵大反乱などで忙しかったため幸運にも植民地化を免れた日本は、ドイツ、イタリアと並んでほぼ同時に民族国家として再生した
 - ・日露戦争はイギリスから見れば代理戦争だった。中国は失地回復のために日本側に立つて参戦する意向を示したが、英国が執拗に説得してやめさせている
 - ・日露戦争の戦後処理に際して日本は小日本主義を採らなかった
 - ・日本の国際的イメージは繊細な工芸の国から軍国主義国となる
 - ・日本は、近隣諸国との友好にも、米英両国との友好関係にも高い優先順位を置かず、孤立と破滅に向かっていった

8) 開戦時の論理破綻と「戦争の墮落」への転回点

- ・戦争初期の熱狂が褪めるのに続いて、願望思考にもとづく戦争の論理が尽き果てる過程がある
- ・第一次大戦のドイツ軍パリ攻撃と日中戦争の日本軍の南京攻略戦（とアメリカ軍のバグダット攻略）に共通なのは、戦争は首都を陥落させれば早期に勝利のうちに終わるという強烈な思い込みである
- ・だからこそ、日本国内では南京陥落を聞いて提灯行列に次ぐ提灯行列が行われた
- ・実際には、相手の抗戦意志を挫かなければ、その首都を占領しても戦勝にならない

9) 戦争の「墮落」とは

- ・クラウゼヴィッツ型の戦争とは。①、外交目的を果たすもう一つ的手段
- ②、正規軍同士が決戦によって勝敗を決し
- ③、短期で終結し、勝利側に有利であるが合理性を逸脱しない講和条約で終わる
 - ・クラウゼヴィッツ型戦争は理想型であり、実は願望思考の産物であるから、実際に経験する戦争は、このモデルからみれば多かれ少なかれ「墮落した戦争」ということになる
 - ・意外にも、もつとも”成功した”戦争は、中国共産党が行った長く苦しい戦争であるという見方が可能
- ①、中国との戦争は二度としたくないと思わせること
- ②、相手の恨みを買わないようにしていること
- ③、この二つは共に強力な安全保障である

- ・必ずしもゲリラ戦ではない
- ・日中戦争の百团大戦、朝鮮戦争、中印戦争、中越戦争、(ソ連とのダマンスキー島抗争)
- ・以上の戦争を通じて、中国はすべての国境を接する国との自国優位の安定を確保
- ・軍事が政治に従属し、戦争が外交の手段となっている点が一貫している
- ・ナポレオン戦争以降、たいていの戦争は願望思想的にクラウゼヴィッツ型戦争で開始し、願望思考の破綻が明々白々となった後、容易に墮落して「終結の仕方が見えないという形での墮落した戦争」となる
- ・武器を初めとする第三国の援助がなくなれば多くの戦争は自然鎮火に終わったであろう
- ・日中戦争も、日中が自前の資源だけで闘ったら自然鎮火に終わる可能性があった
- ・宣戦布告なき戦争は、日中のみならず米英をはじめとする武器・戦略物資輸出国全体に有利であったからこそ、国際的承認を得ていた
- ・米ソ冷戦の代理戦争 - 冷厳な事実、実戦を戦ったことのない世代からなる軍隊は、実習を行っていない医学生と同じく実戦において役に立たない
- ・戦争の墮落の現れ。①、戦争が敵兵の死体数の増加を競うようになること
- ②、都市、工場、農地、農家、貯水池、森林の破壊
- ③、市民の殺戮、特に男子の殺戮によって兵士予備軍を減らし、女子、小児の殺戮によって、兵士の再生産を奪うこと

10) 非対称戦争

- ・日中戦争および二〇世紀後半の主な戦争に共通の条件は非対称戦争
- ・兵士の人的損害をどれだけ顧慮するか
- ・第二次大戦では「総力戦」となり市民を敵の生産力、潜在的兵力と数えるようになった
- ・戦闘の時間と休息の時間の有無
- ・戦闘員と非戦闘員とが服装・徽章などによって識別しがたいのが非対称戦争
- ・前線と後方の区別がつかなくなる
- ・外国人組織が加わって局面を厄介にする
- ・通常戦争には最後に「名誉のための出撃」が試みられる。戦艦大和の出撃は名誉のための出撃が反対に遭わずに実現した珍しい例
- ・イラク戦争では爆装した個人による「自爆攻撃」という形で決定的に非対称性を帯びるに至った
- ・非対称戦争は。①、価値観の違う軍隊間に起こる戦争である
- ②、戦争形式は質的に異なり、敵対者間に共通のルールが生まれる余地があっても少ない
- ③、一般に非正規性を強く帯びる側は軍事的に劣勢である
- ④、非正規性が明確な側は本土防衛戦を戦う側である
- ⑤、劣勢軍の方が、兵士に大義を説き作戦の意義を教示する傾向がある
- ・以上の概観から、非対称戦争が絶えざる緊張を生み戦争法規違反、残虐行為、市民被害

を生む確率がきわめて高く、戦闘員の熱狂性を強化せざるをえないことが結論づけられる

- ・正規軍同士のクラウゼヴィッツ型戦争は、今後、起こっても稀であろう
- ・一般に内戦は、非対称戦争の非正規軍同士の戦闘の様相を帯びる

11) 人間はいかにして「戦争人 Homo pugnans」たりうるか

- ・通常の間人を戦士に仕立てるには、人性の一面を育て、人性の他の面を抑圧しなければならない
- ・一般社会を「娑婆」と呼んで、そのルールの一切が通用せぬ世界に入ったことを示す工夫が様々になされた。「不条理ゆえにわれ信ず」という逆理が大いに利用された
- ・一般にもっとも現実ばなれしうるのは上級指揮官であることも無視できない
- ・(米軍は)兵士の発砲率向上を心理学者に命じ、朝鮮戦争において55%、ベトナム戦争において実に95%の発砲率を達成した

12) 戦争の後始末と平和の構築

- ・リデル＝ハート『戦略論』 成功した戦争は少なく、戦争の後遺症は予想外に永続的
- ・ナポレオン軍に対するスペインのゲリラ闘争は、百年以上後の20世紀のスペイン市民戦争にも影響。ベトナム戦争以降の米国の政策は依然「ベトナム症候群」の呪縛の中にある
- ・積極的な平和構築がない戦争準備は時には戦争を呼ぶ
- ・もっとも成功した平和構築でも、ヨーロッパの近代に限っていえば、その有効期限は50年前後であるようである
- ・各世紀のほぼ前半に戦争があつて西欧全体を揺るがし、それに続いて、新たに生まれた比較的安定した世界で産業、科学、芸術、生活様式の革命的变化が起こるからではないか
- ・16世紀の宗教戦争、17世紀の三〇年戦争、19世紀のフランス革命とナポレオン戦争、20世紀の両世界大戦とロシア革命。いずれも各世紀の前半に傾いている
- ・なぜ五〇年か。同じく原因のわからない周期に経済変動のコンドラチェフ周期がある。
- ・これは幼年期と老年期を除いた人の寿命と同じである
- ・戦争勃発のリスクが前の戦争を経験した世代の引退とともに高まるということが思い合わされる
- ・アレクサンドロス大王が作りだしたヘレニズム世界、それを継いだローマ世界、これにとって代わったイスラム世界は、数世紀の平和をもたらした
- ・その固有世界を超える一つの「普遍的」文化を創りだしたことによる
- ・東アジアにおいて二千年を越える中国の覇権も、武力でなく、人種、宗教などを二義的とする普遍的な文化によるものであつた
- ・米国文化はソ連時代のロシア人に対しても現代の中国人に対しても吸引力があることを証明したが、それが18世紀のフランス文化、19世紀の英国文化というヨーロッパ文化の下位文化の吸引力の程度を超えるものかはまだわからない